

# 2018年度LET関西支部春季研究大会

2018年5月26日（土）

千里ライフサイエンスセンター（大阪府豊中市）



## ワークショップ 1

Creating input rich English lessons in English:

Small Talk and Gestures

佐藤 臨太郎先生（奈良教育大学）



### <概要>

Senior (and junior) high school teachers are now highly encouraged to conduct their lessons mainly in English. In the WS, after thinking about the purposes of English-medium lessons, we will discuss how effectively teachers can conduct English lessons in English, focusing on small talk<sup>1</sup> and gestures<sup>2</sup>. Participants will actually experience effective small talk and gestures. I'm looking forward to your active participation.

（ワークショップは英語で行なわれます）

### <講師略歴>

奈良教育大学教授。博士(学校教育学)。専門は英語教育学・(EFL)教室第2言語習得。共著書に『日本人学習者に合った効果的英語教授法入門』（明治図書）、『英語テスト作成入門 効果的なテストで授業を変える!』（金星堂）がある。中高の検定教科書作成にも携わる。目下の趣味はマラソンと筋トレ。

## ワークショップ 2

コミュニケーション課題の準備と活動における留意点

松村 昌紀先生（名城大学）



### <概要>

言語学習のためのコミュニケーション課題に関する理解を深めることを目指す。「練習」(exercises)と「課題」(tasks)の境界を検討したうえで、特に後者のさまざまなタイプを捉えるための枠組みを示す。そのうえで、学習者の状況や教室環境、時間の制約などに応じて課題の準備と活動場面それぞれでどのような工夫と調整が可能か、それらがどのように学習の幅を広げることになるのか、参加者とともに考えていきたい。

### <講師略歴>

三重県立高等学校教員として勤務の後、愛知県、神奈川県内の大学を経て、現在名城大学理工学部で英語科目を担当；研究領域は第二言語習得、特に言語発達のための環境条件と手がかり（学習可能性）の問題；著書に『英語教育を知る58の鍵』（大修館書店、2009年）、『タスク・ベースの言語指導——TBLTの理解と実践』（共著、大修館書店、2017年）など。

## ワークショップ 3

機械翻訳を外国語教育に活用する

山田 優先生（関西大学）



### <概要>

本ワークショップでは、TILT（Translation in Language Teaching =「翻訳」の外国語教育への応用/SLAにおける「訳」の復権）（Cook 2010）という考え方に基づき、現状の機械翻訳の仕組みと実力について理解し、機械翻訳を外国語教育に活用する方法を学びます。機械翻訳の訳文の中に誤訳やエラーは存在しますので、学習用に利用するためには、まず現状の機械翻訳のエラーの癖や傾向を把握しておく必要があります。これらを見極めた上で、本ワークショップでは授業で活用できるアクティビティを紹介します。

### <講師略歴>

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程修了。博士（異文化コミュニケーション学/翻訳通訳学）。関西大学外国語学部/外国語教育学研究科教授。日本通訳翻訳学会（JAITS）理事。社内通訳者・実務翻訳者を経て、最近では翻訳通訳研究に没頭する。研究の関心は、翻訳テクノロジー論、翻訳プロセス研究（TPR）、翻訳通訳教育論（TILT）など。

# シンポジウム

## ～インプットとアウトプットを統合した活動と評価～

パネリスト： 松村 昌紀 先生 (名城大学)  
佐藤 臨太郎 先生 (奈良教育大学)  
今井 裕之 先生 (関西大学)



### 松村 昌紀 先生



#### 言語教育における探索・経験・創発

「インプット」、「アウトプット」という語の使用そのものに象徴される一方向の情報処理モデルと表象主義の考え方は、必然的に還元主義的で項目蓄積的、リニアな言語学習観へと行き着く。そうした考え方が支配的な状況の中で、より探索的で有機的・統合的な経験を重視する言語教育を、その効果に信を置いて構想することは可能だろうか。その際に求められる新たな視点や発想の転換について、指導や評価における具体的な論点に即して議論する。

### 佐藤 臨太郎 先生



#### EFL環境での「理解→練習→使用」という流れの授業において

日常生活においてほとんど英語に触れる機会がなく、生徒が学校での限られた授業時間で教科の1つとして英語を学んでいるEFL学習環境においては、明示的知識の獲得とその意図的使用を重視した「理解(Presentation)-練習(Practice)-使用(Production)」を基本とするインプットからアウトプットへの流れがふさわしいと考える。本発表ではこの伝統的なPPPの潜在的な弱点をどのように克服し、いかに生徒に潤沢なインプットを与えアウトプットへつなげていくかを、理論的背景・実践面・生徒の情意面(Learning mindset)などから提案したい。評価については自分の疑問を投げかけ、他のシンポジストや皆様のご意見を伺いたい。(皆様との積極的な熱い意見交換・議論を期待しています。)

### 今井 裕之 先生



#### 統合型言語活動の指導と評価の課題

大学入試改革によるスピーキング・ライティング評価導入、Can-Doリストによる「到達目標」の提示、「インプット」「アウトプット」の技能統合的な言語活動の促進など、現在の学校英語教育は、全方位的(目標、指導、評価)な改革要求に晒されている。本発表では、スピーキングの評価と指導を事例として、現在の英語教育改革へのさまざまな疑問や不安「指導は技能統合なのに評価は技能別とするのか?」「統合的な言語活動しながら語彙4000-5000語ってどうしろと?」「外部試験を目標に指導するのが指導と評価の一体化?」等、自身の答えを持たなければ授業実践が前に進まない問題点を議論したい。

【プロフィール】 関西大学外国語学部教授。学部および外国語教育学研究科で英語教育関係の科目を担当。研究領域は社会文化理論に基づく英語授業研究、教師教育研究、およびスピーキング評価。著書に『HOPE中高生のための英語スピーキングテスト』(教育出版)『リフレクティブな英語教育をめざして：教師の語りが拓く授業研究』(ひつじ書房) 中学校検定教科書New Crown English Series (三省堂)の編著など。

<http://www.let-kansai.org/>